

9 研究の成果と課題

今回の研究実践では、「新たな価値を創造する力」の育成に向けて、「適応力」に焦点を当て、友達が見つけてくれた自分のよさを知り、より自分に自信をもって生活をするように授業作りをした。

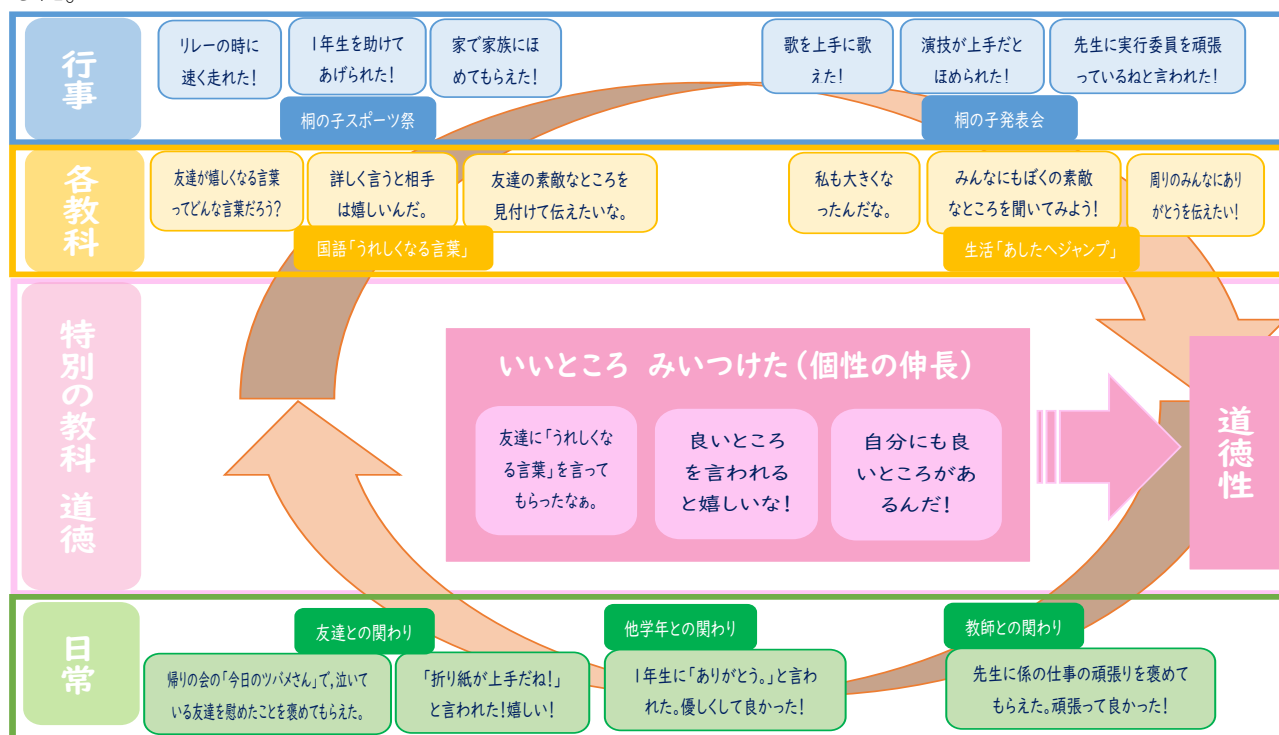


図1 「適応力」に焦点を当てた授業構想

図のように国語科や生活科、行事や日常生活と関連させることにより、より効果的な指導になるようにした。特に、低学年の発達段階では自分自身を客観視することは十分にできないため、事前に国語科の「うれしくなる言葉」という学習や学級経営の中で、友達にたくさんのよさを見つけてもらった。そして、それを取り入れて授業を展開することにより、児童は自分のよさを知ることができた。その後も、継続的に他者からの承認活動を行うことにより、さらに喜びを得ることができた。また、その喜びを得ようと、自分のよさをこれからも見つけていこうとする意欲や態度を養うことができた。

一方で、道徳科の実践に他教科や日常生活について取り入れる場合は、教材との関連を考える必要があった。今回の教科書の教材は、「よいところ」の定義を広げられるものであったために、教材から、「よいところ」とは行動面だけでなく性格面も含まれるということ、自分では短所だと考えることも、裏を返せば「よいところ」になり得るという見方ができるようにすると、より理解が深まったと感じる。

10 次年度への展望

中学年になると、より他者との関わりが広がり、判断基準として親や教師だけでなく、友達や身近な人々などが入ってくる。そのため、これまでになかった考え方や価値観に出遭う機会も多くなっていく。

また、中学年になると、新しい教科の学習が始まったり、学級活動などでより自主的に活動する機会が増えたりする。例えば、外国語活動の学習では、新しい言語や文化に出会うことになる。また、係活動では、自分に無い考えをもつ仲間がいて、その意見を受け入れながら運営をすることになる場合もある。それらに柔軟に適応するためには、道徳科の学習において、子供が他者や自己と対話したり協働したりしながら、物事を多方向から捉えたり、様々な角度から考えたりする機会を設定し、多様な感じ方や考え方に触れさせる授業を行う必要があると考える。

今回の実践をもとに、「適応力」を視点に、柔軟にアプローチの仕方を変える子供の姿を目指したい。